２０２４．９．２２（日）使徒１９：１～７

19:1　アポロがコリントにいたときのことであった。パウロは内陸の地方を通ってエペソに下り、何人かの弟子たちに出会った。
19:2　彼らに「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねると、彼らは「いいえ、聖霊がおられるのかどうか、聞いたこともありません」と答えた。
19:3　「それでは、どのようなバプテスマを受けたのですか」と尋ねると、彼らは「ヨハネのバプテスマです」と答えた。
19:4 そこでパウロは言った。「ヨハネは、自分の後に来られる方、すなわちイエスを信じるように人々に告げ、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」
19:5 これを聞いた彼らは、主イエスの名によってバプテスマを受けた。
19:6　パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らは異言を語ったり、預言したりした。
19:7 その人たちは、全員で十二人ほどであった。

＜説教＞

「使徒の働き」18 章 23 節からパウロの第３回伝道旅行のことが記され始めていました。19 章ではその中でエペソでの出来事、つまり使徒パウロを通してなされた神のみわざについて記されています。エペソは当時、小アジア（現在のトルコと大体同じ地域）第一の都市で、地中海東側の都市としてはシリアのアンティオキア、エジプトのアレクサンドリアと並ぶ大きな町でした。陸路と海路の要所、東と西の文化の交流地点でした。特に女神アルテミスを礼拝する壮大な神殿とそれに関わる商売によって繁盛していました。それ故にこの偶像礼拝とパウロが伝えるイエスの福音が衝突する騒動がここエペソで起きることにもなります（19:23-40）。

そんなエペソに、パウロは第２回伝道旅行の終盤に一時的に立ち寄りました。しかし人々の願いを振り切って「神のみこころなら、またあなたがたのところに戻って来ます」と言ってエペソを離れたのでした（18:19-21）。

その後、雄弁で聖書に通じていたアポロがエペソに来ました。そこでアポロの説教を聞いたプリスキラとアキラ夫妻がアポロに〈神の道をもっと正確に説明した〉（18:26）のでした。そのアポロがアカイアに渡り、〈聖書によってイエスがキリストであることを証明し、人々の前で力強くユダヤ人たちを論破し〉（18:28）、その地のキリスト者たちを〈大いに助け〉（18:27）ました。その働きは後に（正にこのときのエペソ滞在中に）パウロがアカイア第一の都市コリントの教会に書いた手紙で、コリント教会について「私が植えて、アポロが水を注ぎました。」（Ｉコリント 3:6）と言うほどでした。もっとも、パウロがそこで一番言いたかったことは、続けて言う「しかし、成長させたのは神です」（同）ということでしたが。

そんな〈アポロがコリントにいたときのこと〉（19:1）でした。パウロが〈内陸の地方を通ってエペソに下〉（同）って来ました。先に言った〈神のみこころ〉（18:21）に従ってのことでした。〈内陸の地方を通って〉とは小アジアの〈ガラテヤの地方やフリュギアを次々に巡って〉（18:23）というのと大体同じことでしょう。そのエペソでパウロは〈何人か

の弟子たちに出会〉(1)いました。〈何人か〉とは〈十二人ほど〉(7)でした。

パウロが〈彼らに「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねると、彼らは「いいえ、聖霊がおられるのかどうか、聞いたこともありません」と答え〉(2)ました。彼らと出会ったパウロがどんな状況で尋ねたのか、出会って何か直感的に感じるものがあったのか、彼らの行動や言葉をしばらく見聞きしてからか、などはわかりません。しかしとにかくそう聞きたくなる何かがあったのでしょう。ルカがここで〈弟子たち〉と言い、パウロが〈信じたとき〉と言っていることから、彼らは確かに「イエス・キリストの弟子」、「イエス・キリストを信じる信仰者」でした。しかしやはり「何かが不充分だ。何かが足りない。」そして「それは何か。そうだ、聖霊についてだ。」そうパウロは気が付いた、いや正に聖霊によって示されたのでしょう。それでパウロは「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねたのでしょう。彼らの答えは「いいえ、聖霊がおられるのかどうか、聞いたこともありません」でした。「案の定」ということでしょうか。

パウロが〈「それでは、どのようなバプテスマを受けたのですか」と尋ねると、彼らは「ヨハネのバプテスマです」と答え〉(3)ました。この答えから、彼らがアポロの教えを受けた人たちだった可能性を私たちは既に先主日に考えました。もちろん本当のところは分かりません。そしてアポロから直接教えを受けたかどうかよりも大きな問題がありました。「聖霊がおられるのかどうか、聞いたこともありません」ということです。ならば〈聖霊を受け〉たかどうかもわからないことにもなるでしょう。そんな彼らに対してパウロは「そもそも聖霊なるお方とは…」と教えを始めたようではありません。「どのようなバプテスマを受けたのですか」と更に尋ね、「ヨハネのバプテスマです」という答えを得ました。このときパウロは「聖霊のバプテスマ」ということを考えていたのではないかと思います。「聖霊を受けましたか」とは、このときは「聖霊のバプテスマを受けましたか」ということとほとんど同じだったのではないかと思います。

さて「(聖霊のバプテスマではなく) ヨハネのバプテスマを受けた」という彼らに対して、「ヨハネは、自分の後に来られる方、すなわちイエスを信じるように人々に告げ、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」とパウロは言いました(4)。「悔い改めのバプテスマつまりヨハネのバプテスマを受けたあなたがたは、ヨハネが告げたように、ヨハネの後に来られた方、すなわちイエスを信じたのだ」とパウロは認めましたということでしょう。〈聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。〉(Ⅰコリント 12:3)とパウロが言うように、彼らもその意味では〈聖霊を受け〉ていました。しかしやはり「聖霊のバプテスマ」は受けていませんでした。それはつまり聖霊降臨前(ペンテコステ)の弟子たちと同じ状態だったと言えるでしょう。その弟子たちにイエスは「ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられる」と言われ(1:5)ました。更に「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」と言われました(1:8)。その約束の通りにペンテコステの日に弟子たちに聖霊が降り、使徒ペテロは集まって来た人々に「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」と語りました(2:38)。パウロもこのエペソの十二人に、イエスのみことばを教え、またペテロと同じことを教えたことでしょう。十字架の死と復

活、そして昇天し父なる神の右に着座され、父とともに聖霊をお送りになったイエスのことを正確に説明したのでしょう。

〈これを聞いた彼らは、主イエスの名によってバプテスマを受けた。パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らは異言を語ったり、預言したりした。〉(19:5-6)。こうして「聖霊のバプテスマ」を受けたこの十二人は〈異言〉によって〈神に向かって語り〉(Ｉコリント 14:2)、〈預言〉によって〈人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって話〉す(同 14:3)ようになりました。そうやって〈自らを成長させ…教会を成長させ〉る(同 14:4)人とされました。そうやってイエスのみことばどおりに「イエスの証人」へと聖霊によって更に新しくされたのです。言うなれば、「聖霊降臨前のキリスト者」から「聖霊降臨後のキリスト者」へと変えられ、成長したのです。信仰の初歩、初心者から熟練者への成長の一歩を踏み出したのです。これがエペソに来たパウロを通してなさった最初の神の素晴らしいみわざでした。

私たちも同じく日々聖霊の更なる恵みを日々神に向かって祈り願い求め、人に向かっては聖霊の力によってイエスの証人として歩んで行きたいと願います。